

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：32632

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12921

研究課題名(和文) グローバル人材育成のための大学英語プレゼンテーション教育の学際的研究

研究課題名(英文) An Interdisciplinary Study of English Presentation Education in Japanese Universities Aimed at Globally Active Human Resources

研究代表者

今井 朋子(田村朋子)(IMAI (TAMURA), TOMOKO)

清泉女子大学・言語教育研究所・専任講師

研究者番号：70465673

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、グローバル人材育成のための大学英語プレゼンテーション教育における日本人らしい自己表現と多様な背景を持つ聴衆に伝わる思考・表現形式について、英語教育、英米文学、社会・認知言語学の視点から明らかにした。社会人へのインタビューでは、EILの概念を主軸に、日本人らしい、かつ多様な背景の聴衆に伝わる英語プレゼンテーションとは何かを明らかにした。また、英米のプレゼンテーションの授業を調査し、聴衆に伝わる思考・表現方法を見出した。日英談話のデータ分析では日本語母語話者の話し方の特徴を明らかにし、英語使用時の注意点を示した。研究成果を「大学英語プレゼンテーションの授業のための指導書」に記した。

研究成果の概要(英文)：This interdisciplinary study explores the use of English expressions that reflect Japanese culture and values by Japanese people giving presentations to audiences with different national and cultural backgrounds. Interviews with globally experienced business presenters were conducted based on the concept of EIL (English as an International Language). The interviews focused on how the business presenters reveal their Japanese culture and values and use different methods from native English speakers to communicate with audiences. By participating in actual English Presentation classes in the US and UK, the researchers learned effective methods of developing ideas and presentation delivery in English. In addition, a comparative analysis of corpus data of native speakers of Japanese/English revealed a contrasting style when communicating. The results were consolidated in a booklet titled "A Teaching Guideline for English Presentation Courses in Japanese Universities."

研究分野：英語教育学

キーワード：グローバル人材の育成 大学英語プレゼンテーション教育 EIL 社会人の英語プレゼンテーションの経験 米国の大学のプレゼンテーションの授業 日本語母語話者と英語母語話者の話し方 英国での英語プレゼンテーション教育 「日本人らしい」表現力

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を開始するに至った背景には、大学の英語教育が学生の英語での読み書き、4技能を伸ばす教育から、国際社会に貢献できるグローバル人材の育成を意識した学生の自己発信・自己表現、論理的思考力の養成する教育に変わってきたことがある。多くの大学が、1、2年生の必修英語プログラムに英語プレゼンテーション、英語ディスカッションの授業を導入するようになった。本研究の研究者が勤務していた大学でも、全1年生対象に英語プレゼンテーション、英語ディスカッションを必修としており、研究者はその指導を行っていた。指導を行っていく中で、大学での英語プレゼンテーション教育は、身振り手振りや目線の調整などのスキルが重視されており、その結果、学生は英米人を真似た、日本人として不自然なプレゼンテーションや、話題や内容の面で大学教育のレベルに達しているとは判断できないプレゼンテーションをすることが多いと感じた。つまり現在の大学における英語プレゼンテーション教育の射程は、いわゆる英米人的な大げさな身振りや手振りを伴うだけの「表現力」の育成に留まっている。

(2) (1)で述べたような経験から、大学教育で育成すべき自己表現・発信力とは、広い視野と深い洞察力を持って課題に取り組み、十分な思考のもと論理性を伴って独自の考えを表現する能力であると言う意識を持ち始め、平成25年度下半期に、本研究の基盤となる研究を行った。大学英語プレゼンテーション教育が英米人的な身振りや手振りを伴うだけの「表現力」の育成に留まっている原因は、日本の大学英語プレゼンテーションで使用されている教科書にあるのではないかと考え、大学英語プレゼンテーションのテキスト(17種類)を分析した。分析の結果、スキル重視のテキストが多い一方で、プレゼンテーションの準備で行われるべきブレインストーミングやアウトライン、アイディア・ディベロップメントなどの思考形成、聴衆への意識の部分を取っているテキストが少ないことが分かった(田村朋子他 2014)。この成果を踏まえて、日本の大学における英語プレゼンテーション教育の射程を広げ、具体的な教授法を考案することは大きな意義があると考えた。

(3) 本研究が立脚するのは、英語を国際語として位置づける EIL (English as an International Language)である。この概念は、つまり、英語は英語母語話者だけに属するものではなく、国やその人の母語に関係なく全ての英語話者の国際補助語(Smith,1983)であるというものであり、1970年代に Larry Smithによって提唱されて以来、様々な研究が行われてきた。この概念の背景には、英語母語話者の英語を非英語母語話者は習得し

なければならないという考え方の弊害から脱却しようという意図がある。EILを基盤とした英語教育について、日野(2003)は、英米的様式ではなく、自己の価値観を表現するような英語を目標とすべきであり、深いレベルでの相互理解は自己の文化や個性が反映された表現を用いなければ達成できないと主張する。このような EIL の概念を基盤とすることで、日本の大学で散見される英米人をまねたプレゼンテーションではなく、日本人として自己の文化や個性を反映した日本人らしい英語プレゼンテーション、英語表現力を実現できるのではないかと考え始めた。

(4) 将来大学生が活躍するグローバル化社会では、様々な国や言語、文化を持った聴衆に対してプレゼンテーションを行う機会が増えると考えた。そのためには、様々な国や言語、文化を持った聴衆との円滑な意思疎通も重要になってくると予想される。そのためには、文化や価値観を反映した自己表現を基礎とする多様性に加えて、円滑な意思疎通のための統一性も必要であり(日野 2008)、例えば、非英語母語話者でも理解できるように導入部、本論、結論部という構成は共有して行うことが大切だと考える(竹下・本名 2012)。すなわち、円滑な意思疎通のための統一性のためには、「英米流」のプレゼンテーションから学べることも大きい。以上のような背景から、国際社会に貢献できるグローバル人材の育成には、日本人らしい表現力および考え方を伴った英語運用力・発信力を向上や多様な背景を持つ聴衆に伝わる英語プレゼンテーションに主眼に置いた大学英語プレゼンテーション教育が必要であると考えに至った。

2. 研究の目的

(1) 日本人が英語でプレゼンテーションを行う上で、日本人らしい自己表現/発信を行っていく必要があると同時に、多様な背景を持つ聴衆と円滑な意思疎通を図るための統一性を実現するためには英米流の思考・表現形式に適応しなければならないと考える。そこで、本研究では、大学英語プレゼンテーション教育における「日本人らしさ」と「英米流」の最適なバランスを見出すことを目指す。両者の最適なバランスを見出すために、英語教育、社会言語学・認知言語学や英米文学の分野における研究成果を統合する。そこで得られた知見を大学における英語教育の現場への導入を試みることを大きな目的とする。

①英語教育

英語教育の視点からは、前述の EIL の概念を軸に置き、日本人らしい自己表現を行いつつ、多様な聴衆に伝わるプレゼンテーションを可能にするための新たな大学英語プレゼンテーション教育を考える。その方法としては、実際にグローバルな場面で活躍する日本

人ビジネスマンの英語プレゼンテーションの実践の経験を聞き、彼らがどのように日本人らしさを保ちながら、様々な言語、文化背景を持つ聴衆に伝わる英語プレゼンテーションを行っているかについて見出す。また、アメリカの大学で開講されているプレゼンテーションの授業を調査し、そこで行なわれている、いわゆる「英米流」のブレインストーミングやアウトライン、アイデア・ディベロップメントなどの思考形成や聴衆への意識の方法、表現形式を明らかにする。

②社会言語学・認知言語学

社会言語学・認知言語学の視点からは、日英対照研究に焦点を当て、日英語の言語使用に関する差異を明らかにし、日本語話者が英語を話す際に気をつけなければいけない点として指摘し、具体的に指導法に盛り込むことを目指す。日英対照研究では、日本語母語話者と英語母語話者が、コミュニケーションにおいて前提とすることが異なることを指摘しており、それが原因となり日本語を母語とする英語学習者がうまく達成できない課題があることが予想されるが、具体的な困難を特定できていない現状がある。日英比較可能な談話データを使用し、両言語の言語使用の特徴を明らかにするとともに、実際の英語学習者の課題などと照らし合わせながら、学習者が英語使用時に特に注意しなければいけない点を意識化できる指導法を考える。

③英米文学

日本人、ひいては個々人に適した表現力とはなにかを考える上で、まず多種多様な表現力を知り、それを実際に試してみる必要がある。文学、とくに英米文学の歴史を紐解くと、たとえば演劇における「演技」(acting)と詩、物語、小説などの「朗読」(reading)は内容理解に基づく自然で感情豊かな抑揚を特徴としており、それはプレゼンテーションの重要な要素である。ただし、日本における文学研究では、これらの朗読や演技について、「実演」(performance)というレベルで研究している例は少なく、しかも英語教育との関連で論じているものに至っては、京都女子大学文学部英文学会で行われた演劇教育の実践報告(日高, 2012)があるものの、その数はきわめて少ない。一方で、中学・高等学校では、「音読」の指導が熱心に行われているものの、それはプレゼンテーションを視野に入れておらず、結果として大学生の自己表現・発信力の向上につながっていない。したがって、本研究では、英米文学、特に「実演」のレベルでの研究をさらに進め、どのように英語プレゼンテーション教育に応用できるかを模索し、日本人らしい自己表現・発信力の養成に資する方法を見出すことを目指す。

以上のような英語教育、英米文学、社会言語学・認知言語学の視点を統合した分野横断的

なアプローチを取ることで、従来の英語教育で主流とされてきた英米式一辺倒なプレゼンテーションではなく、日本人らしい自己表現を特徴とし、且つ国際的な場面で多様なリスナーに対応しうる英語プレゼンテーションのあり方を明らかにすることを旨とする。

3. 研究の方法

本研究では、英語教育、英米文学、社会言語学・認知言語学それぞれの分野の研究を行いその成果を最終的に統合する形で進められた。最終年度は、それぞれの分野で行われた研究、米国調査、英国調査の成果をまとめ、グローバル人材の育成のための大学の英語プレゼンテーションの授業において教師が活用できる「大学英語プレゼンテーションの授業のための指導書」を作成した。

(1) 英語教育の観点からの研究では、一年目は、国際的な舞台において英語でプレゼンテーションをする機会のあるビジネスマン(商社勤務、放送業界、技術者の4名)を対象に、英語でのプレゼンテーションをした経験についてインタビューを行った。インタビューでは、特に、様々な国や言語、文化的背景を持つ聴衆に対して英語でプレゼンテーションを行う上での課題や日本人としてどのような意識をしているかについてなどを中心に聞いた。インタビューは、基本的には一対一で行い、録画録音をした。その後録音データを文字起こしし、特にプレゼンターの聴衆への意識についての語りに焦点を当てて分析を行った。二年目は、前年度に引き続きビジネスマン(商社勤務、メーカー勤務の3名)に英語プレゼンテーションの経験についてのインタビュー調査を行った。また、アメリカ合衆国東海岸にある大学の学部のプレゼンテーションの授業(3クラス)の観察を行い、その後担当教員2名にインタビュー、学生にアンケートを行い、アメリカの大学ではどのような方針のもとプレゼンテーションの授業が行われているか、その授業を受講している学生のプレゼンテーションに対する意識に関する調査を行った。最終年度は、指導書作成に向けて、一年目、二年目に行ったビジネスマンへのインタビュー調査データや米国大学のプレゼンテーションの授業のビデオや教員のインタビューデータを分析し、特にEILの視点に立った日本人らしい英語プレゼンテーションに関する発言及び米国の教育から日本の大学生にとって有益だと考えられる箇所を抽出してまとめた。

(2) 社会言語学・認知言語学の観点からの研究においては、一年目は、日英談話データ(「ミスター・オー・コーパス」=科学研究費補助金基盤研究(B)[課題番号[15320054]「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」(代表者 井出祥子)において、2006年5,6月に収

集された異言語間比較のためのコーパスデータセット]を観察した。日本語母語話者、英語母語話者それぞれの母語による、絵カードを描写するタスクを行った際の録画データを、絵カードのどこに焦点を当てて話者が語ったのかに焦点を当てて分析した。二年目には、同コーパス内の母語話者同士二人組の会話データにおいて、話者が高頻度で使う語や形式について分析し、また、それらが話者間の相互理解にどのように貢献しているのかに着目して、日本語母語話者と英語母語話者の相互理解の進め方についても観察した。最終年度には、一年目および二年目に明らかになった日本語母語話者の心内状況について高頻度で言及する傾向と、「思う」という思考動詞を引用形式で多用する傾向について、さらなる知見を得るため、全データを見直すとともに、日英語の引用に関する研究も行った。そして、その成果と英語プレゼンテーション教育の指導へと接続する具体案を検討した。

(3) 英文学の観点からの研究においては、初年度(平成27年度)に東京女子大学教養学部的一年次リーディングの授業において文学作品の読解とプレゼンテーションを融合させたリーディング・サークルというアクティビティを実践した。このアクティビティは、3~4人から成るグループに分かれ、オックスフォード大学出版局から出版されているBookwormシリーズの一冊を6回に分けて読み、作者、あらすじ、登場人物などの基本情報を押さえた上で、作品の興味深い点について考察し、その結果をプレゼンテーションするというものである。平成28年度は、信州大学人文学部の英国オックスフォード研修に際して、現地でのプロジェクト・ワークをサポートし、受講者に効果的なプレゼンテーションの指導を行った。また英国でパブリック・スピーキングのコースを受講し、英国ではプレゼンテーションをどのように教えているか-とくにステージ・フライト(人前で話すときの不安)をいかに克服するか-について調査を行った。最終年度は、平成28年度に行った英国でのパブリック・スピーキングのコース受講で得た知見に基づき、とくにステージ・フライト(人前で話すときの不安)の克服の仕方やボディ・ランゲージやヴォイスの重要性、および結論部の構成についてまとめ、前出の「指導書」に記述した。

4. 研究成果

(1) ビジネスマンへのインタビュー調査

①調査の概要と分析結果

初年度(平成27年8月~平成28年2月)に田村朋子と野村佑子で4名のビジネスマン(商社営業2名、放送関係1名、電力関係1名)に英語でプレゼンテーションを行った経験についてインタビューを行った。ビジネスマンが英語でプレゼンテーションを行う上で

の聴衆への意識に焦点を当てて、どのように聴衆とコミュニケーションを図ったかについてインタビューデータの分析をKJ法(川喜田,1986)を用いて行った。分析の結果、ビジネスマンは聴衆とのコミュニケーションにおいて、1)英語の正確さよりもありのままを伝える、2)聴衆を自分の側に上手く引き入れる、3)聴衆と同等な関係を築くという3点を重要視していることがわかった。具体的には、1)「英語の正確さよりもありのままを伝える」ためにビジネスマンは、オーディエンスに自分の価値を共有できていることが一番大切と考えており、そのためにも、自分で撮影した視覚情報を提示して自分の伝えたいイメージがそのまま聴衆に伝わる努力をしたり、公式資料にある英語の用語や表現を使用して聴衆に客観的な情報伝達ができるように工夫をしていることがわかった。2)「聴衆を自分の側に上手く引き入れる」ために、ビジネスマンは、プレゼンテーション中に適度に間を取り、聴衆を引き付け続ける工夫をしている。また、なるべく自分の話に集中してもらうために、最初に聴衆に注意喚起を促がすなどの努力をしていることがわかった。3)「聴衆と同等な関係を築く」ために、ビジネスマンは聴衆に身近に感じてもらえるような話題を盛り込みながら話すことを心がけている。また聴衆に予備知識がない場合は、短い説明で補いながら、共通理解ができていない部分をうまく織り交ぜ、聴衆の共感を得ようとしている。

②大学英語プレゼンテーション教育への応用

本調査の結果をどのように大学英語プレゼンテーション教育に応用できるかについて以下の通り提案を行った。「正しい情報の伝え方の指導」としては、学生に、公式資料や英字新聞から用語を引用させたり、自分自身で動画や写真を撮影させたりすることでありのままを伝えることができるような指導を提案した。また「聴衆をプレゼンター側へ引き込む方法の指導」としては、聴衆の集中を促す効果的な「間の取り方」の指導を行うことを提案した。また、まず自分のプレゼンテーションを先にさせて欲しいという意思を示す英語表現を教えることが必要と考え、そのうちの一つに、プレゼンテーションの目的を最初に聴衆と共有する方法をEILの視点から提案した。さらに、学生が「聴衆と同等な関係を築く」ためには、学生が聴衆の文化や言語、聴衆が知りたいこと、聴衆が置かれている状況など聴衆について詳しく調査し、それをプレゼンテーションに盛り込むように指導することを提案した。

(2) 米国調査

平成29年3月20日~3月26日までアメリカ合衆国東海岸にある大学の学部生対象のプレゼンテーションの授業を調査した。その後

担当教員2名（A教員とB教員）にインタビューと授業を受講していた学生達にアンケートを行った。A教員の授業では、学生が自分の興味のあることに関して自由にスライド（パワーポイント）使って、デモも交えてプレゼンをしていた。学生は、プレゼン初心者なので、この時点では、緊張を緩和するために、スピーチ原稿を読みあげてことを認めていた。A教員は、他人のプレゼンテーションやスピーチからテクニックを学ぶように学生に指導しており、聴衆の学生にピア評価をさせていた。学生は、それ持参した Index card に良かった点と改善すべき点について記入しそれをプレゼンターの学生に渡していた。ピア評価で指摘したことは自分にも当てはまるので、そこから学生に学んで欲しいとA教員は述べていた。B教員の授業では、就職の面接という設定で、授業が行われていた。学生がそれぞれ将来職業を想定して、その就職面接を受けると言うプレゼンテーションを行っていた。B教員が面接官になり、それぞれの学生の想定した職業にあったインタビューを行い、学生はその質問に答えるという形で行われていた。面接はクラス全員の前で、行われた。それぞれの面接の後、聴衆の学生が感想を述べていた。B教員は自身がスピーチコーチであることから、アイコンタクトや声の調子、大きさ、抑揚などを中心に学生にアドバイスをしていた。

(3) 日英語母語話者のコミュニケーションのデータを分析した結果、日本語母語話者は、英語話者よりも、対象物（人）の感情や思いなどの心内情報を語りの対象とすることが多く、また「思う」という思考動詞を引用形式で用いることが明らかになった。これを踏まえて、学習者の英語プレゼンテーションを観察すると、I think を多用していることがわかり、学習者は日本語における「思う」の感覚で I think を用いていると考えられた。ところが、英語において I think は日本語の「思う」とは異なり、自身の考えが不明確である場合などに用いることが多いために（Grice 1975）、I think を英語プレゼンテーションで多用することが、不明確な情報を提供している印象を与え、効果的なプレゼンテーションにならない。そこで、指導案には I think を多用しないよう意識すること、また日本語を安易に英語にしてプレゼンテーションしないよう注意すること、を盛り込む提案をした。

(4) 初年度（平成 27 年度）は、東京女子大学教養学部的一年次リーディングの授業において文学作品の読解とプレゼンテーションを融合させたリーディング・サークルというアクティビティの実践報告を Libelit の第 7 会大会で発表した。発表では、文学教材とプレゼンテーションの融合が学習者の学習意欲を促すことを明らかにした。ただし、プ

レゼンテーションにおける「実演」という観点からは、たとえばプレゼンテーションの中で登場人物の言葉などを紹介する際に、その時の感情を考えた上で適切な表現方法を考えられるような指導が必要だということがわかった。平成 28 年度は、英国でパブリック・スピーキングのコースを受講し、英国ではプレゼンテーションをどのように教えているか—とくにステージ・フライト（人前で話すときの不安）をいかに克服するか—について調査を行ったが、その際、演劇の要素でもあるボディ・ランゲージやヴォイスが重要な要素として教えられていることを確認した。これらの成果をまとめ、「指導書」に記述した。

(5) 大学英語プレゼンテーションの授業のための指導書

(1)～(4)までの研究成果をまとめて、教員が日本の大学英語プレゼンテーションの授業で学生の指導に活かせる『大学英語プレゼンテーションの授業のための指導書』を作成した。本指導書は、プレゼンテーションの種類や聴衆分析、トピックの選定、アイデアデベロップメント、アウトライン作成、パワーポイントの作成といったプレゼンテーションの準備、physical message や視覚情報の説明の仕方、フィードバックの方法の 11 章で構成されている。ビジネスマンへのインタビューから得られた実践については、とくに EIL の視点から「ビジネスマンからの Tips」として各章に載せた。また、英国のプレゼンテーションワークショップや米国の大学のプレゼンテーションの授業から得られた日本の大学英語プレゼンテーションの授業に取り入れることが有益と思われる英米方式についても掲載している。とくに、英国調査からは、聴衆に伝わるプレゼンテーションの構成やステージフライト（人前で話す不安）の克服の仕方を、米国調査からは、トピックの選定やアイデアデベロップメントの方法、有効なフィードバックの方法について、授業で実践できるアクティビティの例を掲載した。そして、社会言語学・認知言語学の視点からは、日英語比較研究から得られた日本人が英語プレゼンテーションを行う際に気をつける点を記した。例えば、日本人は“I think”＝「～と思う」と認識しており、それを多用する傾向にあるが、それは聴衆に不確かな情報を提供しているような誤解を与えるといったことである。

(6) 国内外における本研究の位置付けとインパクト

今後グローバル社会で活躍する人材の育成には、英米流に迎合するのではなく、日本人が日本人らしさを保ちながら、かつ様々な国や文化背景を持つ人々とコミュニケーションを図ることが重要となってくる。本研究がその重要性を周知し、具体的な大学英語プレ

ゼンテーション教育のあり方を提案したことは、英米流に偏った日本の大学英語プレゼンテーション教育に一石を投じたと言える。また、他の国や文化においても、それぞれの国のグローバル人材の育成において、～人らしい英語プレゼンテーション教育について考えることは意義深いと考える。本研究はそのきっかけになったと言える。

(7) 今後の展望

①『大学英語プレゼンテーションの授業のための指導書』を使用して授業を行い、学生の英語プレゼンテーションに対する意識について調査を行う。

②ビジネスマンにインタビューを行う中で、ビジネスマンは、英語力も限られた中で、日本人であるという自らの立場をよく理解した上で、聴衆に自分の言いたいことを伝える努力をしていることがわかった。今後は、このような視点から、インタビューデータの分析を行い、グローバルな場面で活躍する人材の育成に活かせる教育に活かしていくことを考えている。

③EIL や社会・認知言語学の観点から日本人が英語プレゼンテーションで使用する日本人らしい英語表現を提案していくことを考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①田村朋子・野村佑子

大学英語プレゼンテーション教育への提案：グローバル社会で活躍する社会人の英語プレゼンテーションの調査からの一考察、清泉女子大学『言語教育研究』、査読有、第 9 号、2017、131-154

[学会発表] (計 7 件)

①Yuko Nomura

Quotation with the verb omou (think) in Japanese conversation: A Comparative study of quotations with the verb think in English conversation、The 15th International Pragmatics Association Conference Panel: Emancipatory Pragmatics: Approaching Language and Interaction from the Perspectives of Ba(国際学会)、2017年7月17日、Belfast, Northern Ireland

②Kumiko Hoshi

Learning English Literature in Short-Term Overseas Programs: A Practical Report、The 8th Annual Liberlit Conference、2017年02月20日、東京女子大学

③野村佑子

「日英語ナラティブにおける思考動詞の出現位置」シンポジウム「自然談話における思考動詞の使用について」、日本英語学会 第 34 回大会、2016 年 11 月 12 日、金沢大学

④Yuko Nomura

“Quotation of thought for mutual understanding of emotion: A comparative study of Japanese and English conversations”、Sociolinguistic Symposium 21 Colloquia “Tracing socio-cultural and perceptual schema as of non-western interactional practices” (国際学会)、2016 年 06 月 16 日、University of Murcia, Spain

⑤田村朋子・野村佑子

社会人のプレゼンテーションにおける聴衆への意識：グローバル社会の要請に応える大学英語プレゼンテーション教育を目指して、日本英語教育学会第 46 回年次研究集会、2016 年 03 月 13 日、早稲田大学

⑥星久美子

A Practical Report on “Reading Circles” : An Attempt to Incorporate Literature in English Classes at Universities、The 7th Annual Liberlit Conference、2016 年 02 月 22 日、東京女子大学

⑦野村佑子

「語りにおける直接引用による心情描写：英語との比較から」(ワークショップ「日英語談話比較研究の英語教育への貢献」(企画者：野村佑子)における個別発表として)、日本英語学会第 33 回大会、2015 年 11 月 21 日、関西外国語大学

[図書] (計 1 件)

①田村朋子・星久美子・野村佑子(著)

『大学英語プレゼンテーションの授業のための指導書』、2018 年 3 月 31 日、31 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 朋子 (田村 朋子) (IMAI (TAMURA) TOMOKO)

清泉女子大学・言語教育研究所・専任講師
研究者番号：70465673

(2) 研究分担者

野村 佑子 (NOMURA YUKO)
順天堂大学・国際教養学部・教育講師
研究者番号：20712954

(2) 研究分担者

星 久美子 (HOSHI KUMIKO)
愛知学院大学・文学部・准教授
研究者番号：20572142